

郷土史研究家・収集家たちの遺した資料

元禄五壬申年誌帖

年寄善右衛門

年誌帳
未正月吉日

天四五拾
後用年誌帖
二月九日

年誌帖
二年

寛政三年
用歳徳帳

高田郡廃寺誌

高田

広島縣観光

HIROSHIMA

広島
の観光

ひろしま
HIROSHIMA

広電バス

広島県

歴史資料が後世に伝えられていく上で、いわゆる郷土史研究家や収集家たちの果たす役割は小さくない。

本来、文書・資料の類は、それを生み出したところ（役所、神社寺院、家、会社、学校、各種団体等）に伝来することが自然な成り行きである。それらは出所と呼ばれ、歴史資料は、通常その出所の名をとって「〇〇文書」という形で世に存在することが多い。

しかし、あらゆる出所が、その伝来資料を適切に保存してきているわけではない。意図的な廃棄のほか、役所が廃止されたり、家が断絶したり、神社や寺院が廃絶したりと、資料はその出所を離れる機会が多く、そのまま散逸してしまうことも珍しくない。また、パンフレットやチラシなど、狭義の文書とも書籍とも異なる印刷物が各所で作られてきているが、これらは、多量に出回るもの（むしろそれ故に）資料として保存されることが少ない。

郷土史研究家や収集家たちは、その研究目的や、趣味や、あるいは地域・郷土への愛着など、様々な動機から文書・資料を集め（あるいは写しを作り）、コレクション的な資料群を遺してきている。その中には、他では見られない資料が含まれていることも多く、それらは彼らが集めていなければ散逸して今に伝わらなかつたと思われる。

コレクション的資料群の全貌は多岐にわたるが、今回の展示ではいくつかの収集資料を取り上げ、郷土史研究家や収集家の遺した資料の一端を紹介したい（なお、ここで紹介するのは、全て故人であることから、原則として敬称は省略した）。

（担当 長沢洋）

のこ

1 青木茂氏旧蔵文書

青木茂(一八九八〜一九八四)は、社会経済史・地方史の研究者として知られ、尾道市立短期大学教授・神戸学院大学経済学部教授を歴任した。『尾道市史(旧版、全三巻)』、『新修尾道市史(全六巻)』、『因島市史』等の市史を手がけ、その他にも『近世における富籤の社会経済史的研究』などの著作がある。

また、青木は、尾道地方を中心とした資料(古文書類)の調査収集にも努めており、それら収集した資料を『尾道市史』をはじめとする著作類に活用した。

これらの古文書は、青木の没後、金光教団に寄贈され、金光図書館が架蔵していたが、平成十二年(二〇〇〇)七月に当館に寄贈された。

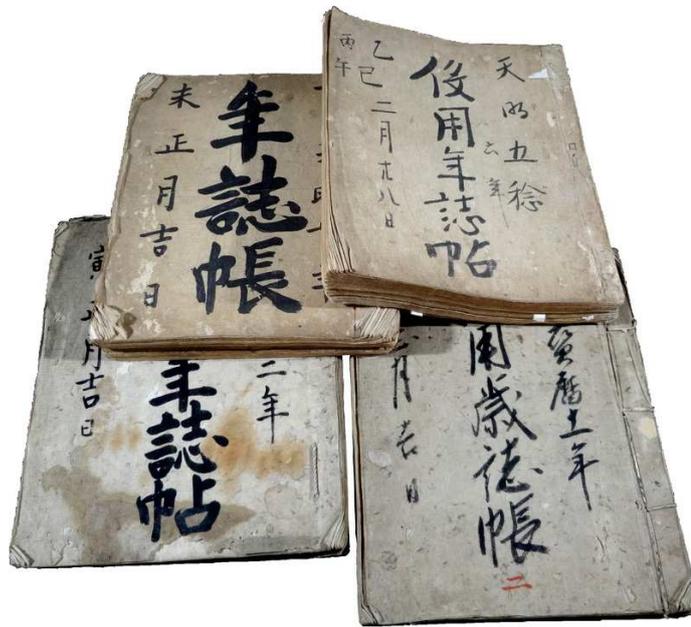


『新修尾道市史』全6巻 (1971〜1972)

青木の著作とも言うべき市史であり、収集した古文書を活用して書かれている。このような大部の市史を、ほぼ一人の著者が執筆したというのは、県内では他に例を見ない。

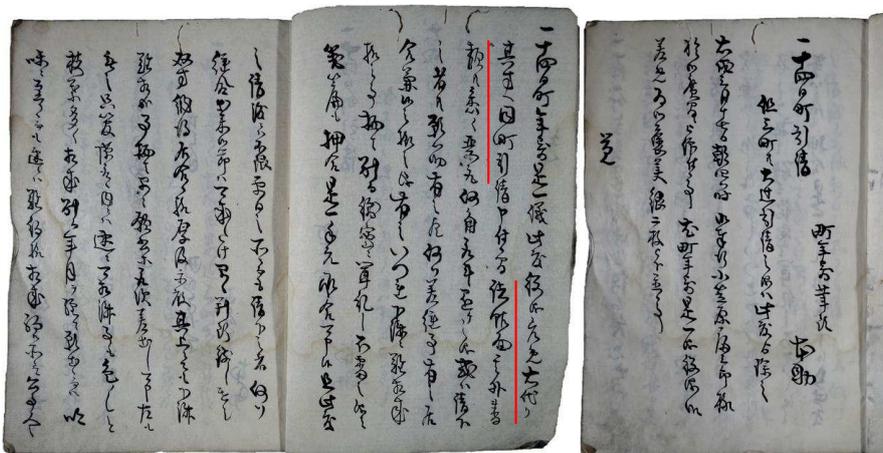
十四日町年誌 宝永二年(一七〇五)〜嘉永五年(一八五二)
青木茂が尾道の豪商だった橋本家などから戦前に譲り受けたもの。

江戸中期から幕末にかけて尾道十四日町の町年寄が作成した公的記録としての年誌であり、いわゆる典型的な「御用留」である。ただし、伝存しない年のものも多い。橋本家は幕末に十四日町年寄を勤めるにあたって、前任者からこれらを引き継いで保管していた。廃藩後、これらの公的記録はそのまま橋本家の所有するところとなっていたようである。



十四日町役方年誌 文化11年(1814)

十四日町は尾道を構成する町の一つである。青木が収集した年誌の大部分は、この十四日町の年寄が役目上作成したものである。



十四日町役方年誌 文化11年 冒頭部分

この年の初め、十四日町では年寄役が交替した。新任の年寄役本助には、前任者より「諸帖面其外書類共悉く受取」ることが命じられている。年誌は年寄役が交替するたびに、このように引き継がれていった。

青木茂氏旧蔵文書 200004/36



富くじ札

青木茂氏旧蔵文書 200004/300/9

左の札には絵が描かれ、その上に「東西々々 此千両ハ外へハやらし 取た々々」という文言が書き込まれている。札を購入した人は、当たりを念じてこのような戯言類を書き込んだ。

富くじ札

青木茂が近世富くじ研究を行う際に収集したものの。

富くじは興業的賭博として、禁制の対象になっていたにも関わらず、各地で盛んに行われていた。

左に掲げたのは、尾道で行われていた富くじの札で、形式的は物品の入札という体であるが、実態は富くじそのものである。

今の宝くじとは異なり、あらかじめ札に書いてある番号で当たりはずれが決まるのではなく、札を購入した者が何か文言や絵を書いておき、それが当たりはずれを識別する印となった。

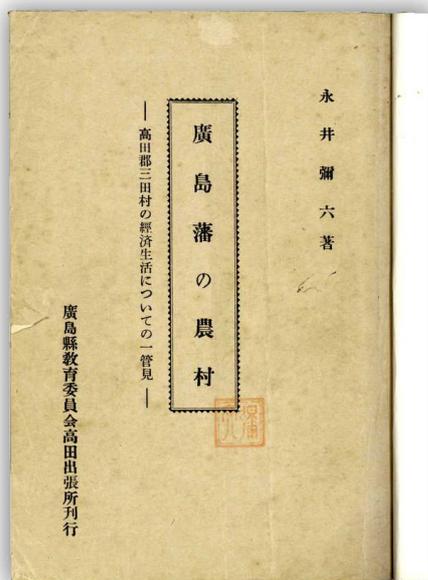
2 永井彌六氏収集文書

永井彌六(一八〇四〜二〇〇〇)は、高田郡三田(現広島市安佐北区白木町三田)出身の郷土史研究家。

戦後間もない昭和二十二年(一九四七)、三田村長となり、町村合併後は白木町長を昭和四十三年(一九六八)まで勤めた。公職の傍ら、近世農村の研究を続け、『広島藩の農村』

『広島藩の庄屋』『安芸国高田郡郷土史こぼればなし』『わがふるさと三田』等、多数の著書がある。

数は多くないが、研究の傍ら古文書類も収集しており、近世村方文書のほか、富くじ札などが残されている。

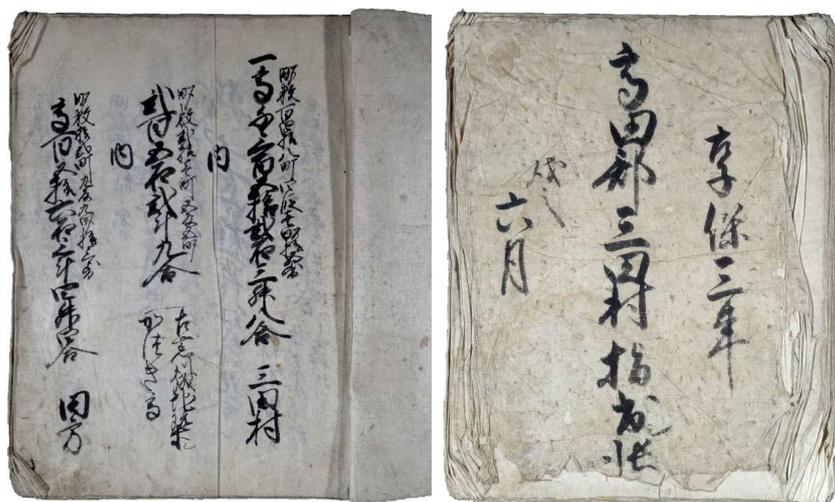


『広島藩の農村』

永井の最初の著作である『広島藩の農村』(昭和二十五年七月刊)は、村長職を勤めながら書いたもので、その内容のユニークさから専門家の目にも留まることになった。

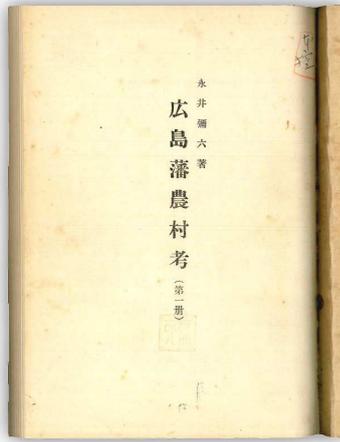
三田村指出張

村指出張は、村ごとに提出した村勢要覧のようなもので、村明細帳とも呼ばれる。村高、年貢率の変遷、雑税の種目と額、人口や村内寺社、周辺村との里程など、その村の基本的な情報が記録されており、永井は最初の著作『広島藩の農村』において、これらを活用している。



高田郡三田村差出シ帳 享保3年(1718)6月 表紙と冒頭部分

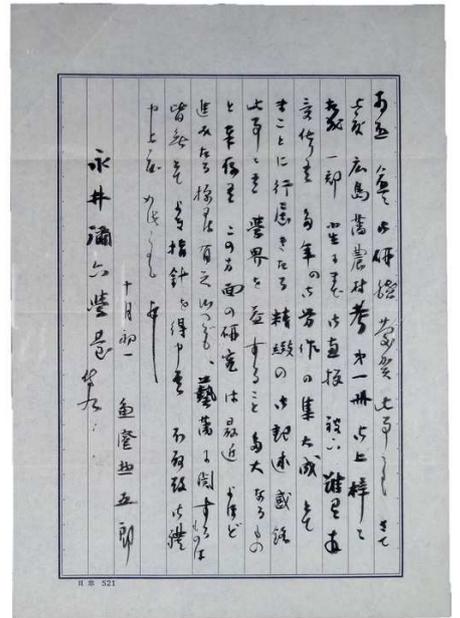
永井彌六氏収集文書 199401/6



『広島藩農村考（第一冊）』

A5判180頁。高田郡吉田町にあった郡山文庫から発行された。当時の価格は230円。

魚澄惣五郎書簡 昭和二十八年（一九五三）十月一日
永井が昭和二十八年に出版した『広島藩農村考（第一冊）』を送られたことへの礼状。魚澄惣五郎は当時の広島大学文学部教授。魚澄は手紙の中で、「この方面の研究は最近よほど進みたる様には有之候へども、芸藩に関するものは皆無にてよき指針を得申候」と評している。



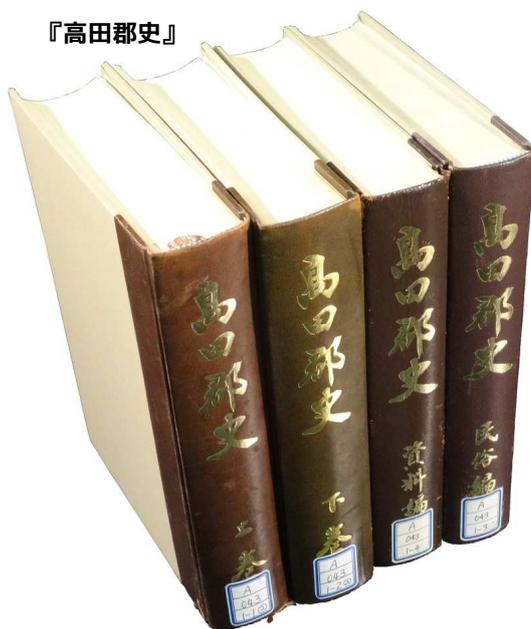
富くじ札（宮島）

表向きは禁制の対象であった富くじであるが、宮島で行われていたものは、広島藩が主体となって興行され、その利益は藩の収入になっていた。
永井が、これらの富くじをどこから入手したのかは不明であるが、藩内では、各地に同様のものが残されていたと思われる。

3 小都勇二資料

小都勇二（一九二一～一九九九）は、高田郡吉田町（現安芸高田市吉田）在住の郷土史研究家。中国新聞社に勤める傍ら、昭和六年（一九三二）に吉田郷土史調査会を結成し、郷土史研究に心血を注いだ。特に、毛利元就と郡山城跡については、いくつも著作を残している。中国新聞社退社後は、吉田郷土資料館長を昭和四十六年（一九七二）から同五十五年（一九八〇）まで勤めた。

編著書に、『高田郡史』（上巻・下巻・民俗編・資料編）、『毛利元就伝』、『続毛利元就伝』、『郡山城跡』等がある。残された資料は、蔵書をはじめとして多岐にわたり、『高田郡史』編纂関係資料のほか、近世・近代・現代の資料原本も多く収集している。



『高田郡史』

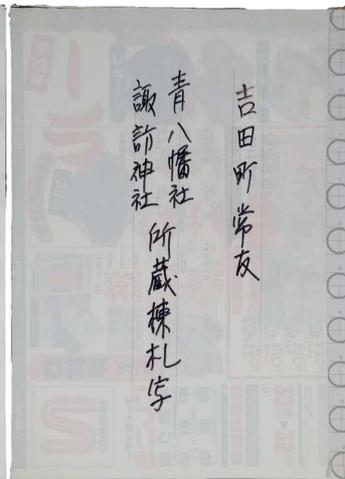
『高田郡史』（全四冊、昭和四十七～五十六）は、奥付こそ高田郡史編纂委員会編となっているが、事実上、小都の単著に近い作品である。小都自身にとつても、主著のひとつとすべき著作である。

高田郡史編さん関係資料（寺院・神社関係資料）

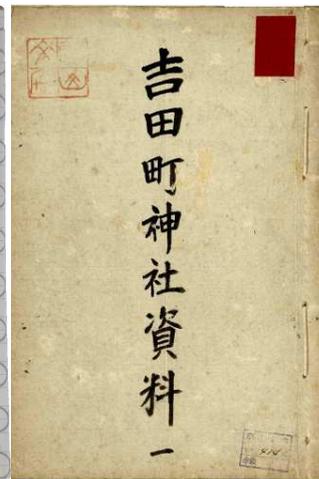
高田郡史を作成するに当たって、小郡は、いわゆる古文書類の収集とともに、地域の寺院・神社を綿密に調べる手法もとっている。ここに掲げたのは、それらを調査した際に収集され、あるいは作成されたもので、『高田郡史上巻』の第七編「神社と寺院」を執筆する上での基礎資料となっている。



清神社棟札



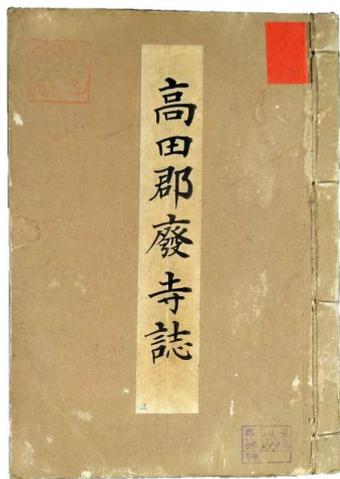
青八幡社・諏訪神社所蔵棟札写



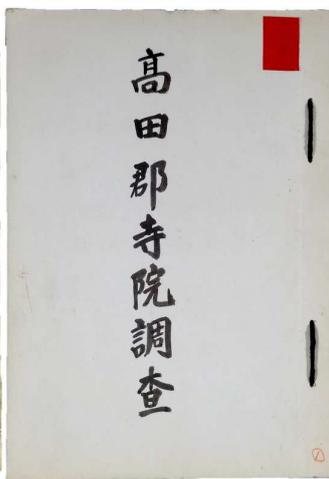
吉田町神社資料 一



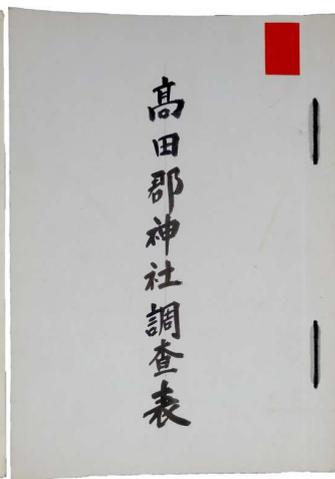
高田郡社寺帳
享保8年(1723)



高田郡廃寺誌



高田郡寺院調査



高田郡神社調査表



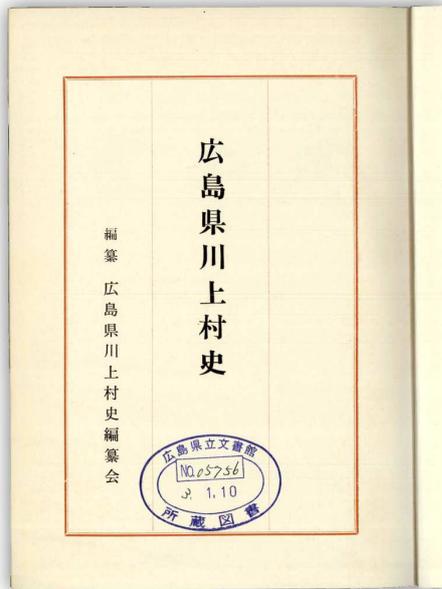
高田郡村々社寺古城山由来記

4 飯田米秋資料

飯田米秋(二九一九〜二〇〇〇)は、東広島市八本松町の郷土史研究者。戦後、東広島市八本松町飯田(旧賀茂郡八本松町飯田)に居住しながら、郷土史研究を開始した。後に、東広島市文化財保護委員長等を務める。

『広島県川上村史』、『賀茂郡史 中世武士編』、『賀茂郡史 原始古代研究編』等の著作がある。

コレクションの性格はやや乏しいが、研究用資料として残されたものには、蔵書類のほか、古文書のコピーが多くあり、特に、文政年間に広島藩が地誌作成のために、各村から提出させた「国郡志御用二付下調べ書出帳」が、東広島地方を中心に多数集められている。

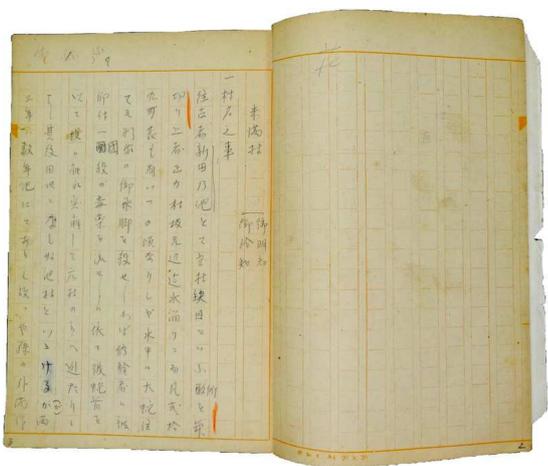


『広島県川上村史』

川上村は、明治二十二年(一八八九)から昭和三十一年(一九五六)まで存続した自治体で、飯田の居住地であった。『広島県川上村史』は十年の年月をかけ、川上村が八本松町に合併して消滅した後、昭和三十五年(一九六〇)に刊行された。飯田は編纂の中心人物の一人で、執筆分量も特に多い。

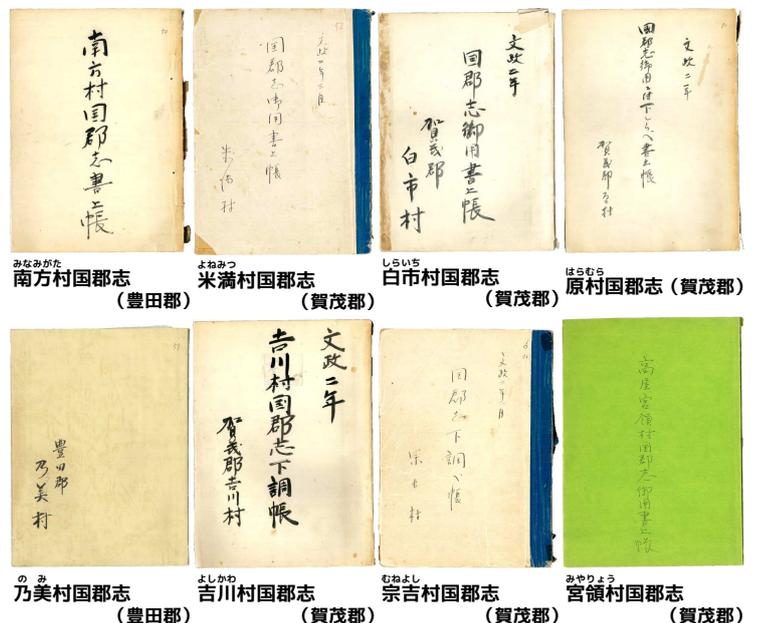
国郡志御用二付下調べ書出帳 コピー・筆写

広島藩が藩内の地誌「芸藩通志」を作成するため、文政年間に村ごとに差し出させたもの。近世の広島藩の村について知るための基礎的資料であるが、今に伝存しない村も多い。飯田は、筆写あるいはコピーを利用してこれらを収集し、自らの研究や、『広島県川上村史』の編纂・執筆に利用した。



よねみつむらこくぐんし 米満村国郡志写し

古い時代に飯田が作成したものは、コピーではなく、原稿用紙に筆写という方法が取られている。





『賀茂郡史—原始古代研究編—』『賀茂台地の昔話』

飯田は賀茂郡をフィールドに、幅広い時代とテーマに関心を寄せ、いくつか著作を残している。古代史の分野では、安芸国の国府の所在について、はじめ西条盆地にあったという所論を展開している。

飯田米秋資料中の国郡志下調べ

【賀茂郡】
郡辻書上
阿賀村
稲木村
奥屋村
川角村
川尻村
冠村
郷原村
米満村
貞重村
重兼村
白市村
高屋堀村
原村
南方村
宮領村
宗吉村
吉川村

【安芸郡】
上瀬野村
矢野村
賀茂郡
【豊田郡】
乃美村
南方村
【世羅郡】
上津田村
篠村

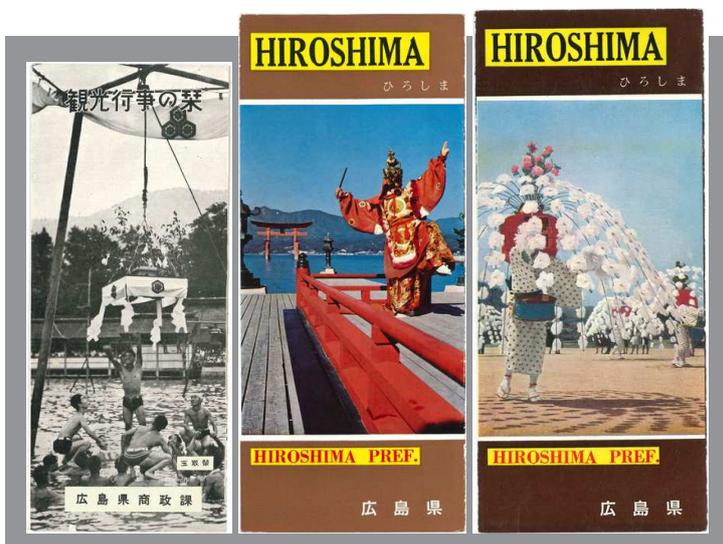
飯田米秋資料の中に見える国郡志下調べは左記のとおりであるが、の中には、印刷されたものも含まれている。また、コピーには出所を確定できないものもある。



5 山田勉孝文書

山田勉孝（一九三〇—一九九八）は、戦後長く広島県職業安定課に勤めた。山田は、いわゆる郷土史研究家ではないが、高度成長期に入るころから、県内を隈なく歩き、観光パフレットの類を収集・保存した。

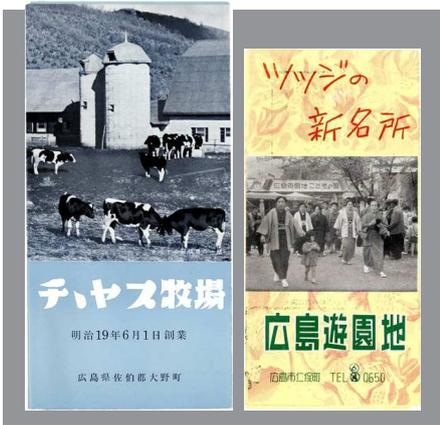
観光パンフレットの類は、大衆観光の普及とともに多数が世に出され、多くの人の手に渡ったと思われるが、資料としては一時的な使用を目的とするもので、体系的に残されることは少ない。観光パンフレットに限らないが、残されにくい資料が利用しやすい状態で残っていることは、山田のような収集家のおかげである。



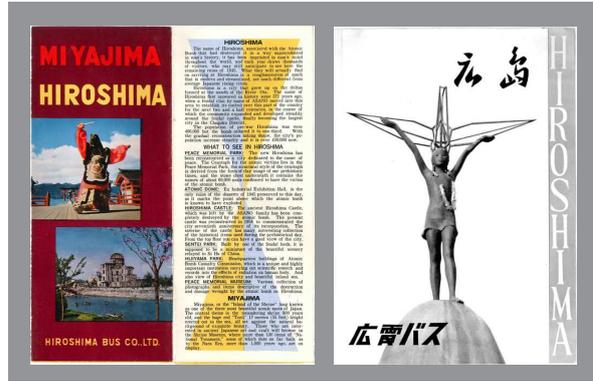
（左）観光行事の祭（昭和30年頃）
（中・右）HIROSHIMA ひろしま（昭和35年頃）



HIROSHJIMA ひろしま（昭和31年）

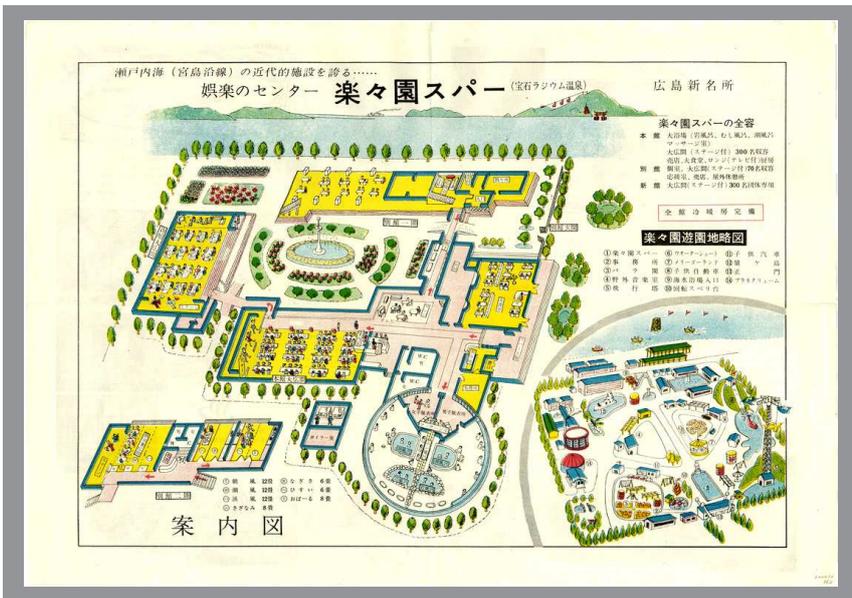


(左) チハヤス牧場 株チハヤス
(右) ツツジの新名所 広島遊園地



(左) MIYAJIMA HIROSHIMA (英語版) 広島バス株
(右) 広島 HIROSHIMA 広島電鉄株

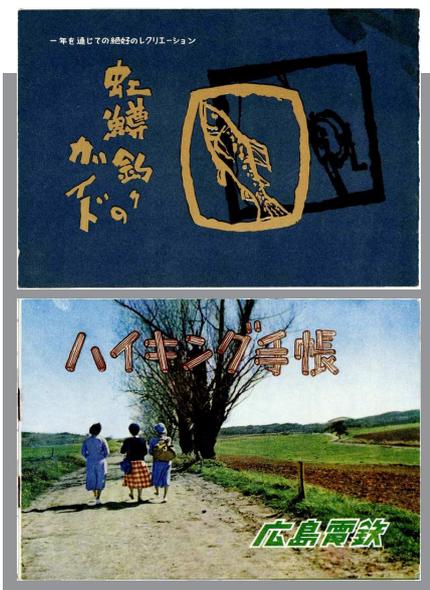
昭和二十年代から三十年代にかけての観光とレジャーに関するパンフレット類を山田はいくつも遺している。それらは、市町村だけでなく観光関連会社や団体が作成したのもも多く、当時の観光状況をうかがい知ることができる資料となっている。



娯楽のセンター 楽々園スパ 楽々園遊園地



海へ 海水浴 キャンプ 納涼船
瀬戸内海汽船株



(上) 虹鱒釣りのガイド 小谷・川魚店
(下) ハイキング手帳 広島電鉄株
(昭和36年)



(左) 帝釈峡 帝釈峡観光協会
(中) 瀬戸内海国立公園 観光の瀬戸田 瀬戸田町
(右) 国立公園 鞆の浦 鞆鉄道株